



第200号 毎月11日は小松島市の人権の日 発行所 小松島市 小松島市教育委員会 小松島市人権教育振興協議会

2025年度 小松島人権教育学級  
**第1回・第2回 講演内容**

2025年8月28日に行われた第1回人権教育学級と9月29日に行われた第2回人権教育学級の内容をお知らせします。  
 ※誌面の都合上、講演を要約しています。

**第1回人権教育学級**  
**「本当の勇氣とは やさしさとは」**

鮎喰教育集会所 主事  
 弘瀬 喜代 さん

今日は、私が40年以上にわたり向き合ってきた「結婚差別」の問題について、実際の体験を交えながらお話ししたいと思います。今もなお、現実に人の人生を深く傷つけている問題です。

最初に私がこの問題に直面したのは、24歳のときでした。保育士として働いていたある日、いつも元気で明るいお母さんが、真っ赤に腫れた目で私の前に座りました。声を震わせながら、その方はこう言いました。「甥っ子の結婚が親戚に反対されています。相手が同和地区の出身だからです……」

私は胸を突かれる思いでした。甥御さんは真面目で働き者、相手の女性も人柄の立派な方。2人は心から愛し合い、共に生きていこうと決めていました。ところが、結婚式の招待状を出したところ、21軒の親戚のうち19軒が「欠席」と返してきたのです。その背景には、親戚内で「同和地区の人間と一緒に披露宴など出られるか。」その冷たい一言が、親戚たちを次々と反対に回らせたのです。

私は居ても立ってもいられず、そのお母さんと一緒に、欠席を表明した19軒を一軒一軒訪ね歩きました。昼間は仕事、夜は説得。そんな日々が2か月半続きました。私は「人は出身で判断されるべきではない」「差別は不合理だ」と理屈を並べました。



しかし、頭では理解できても、心はなかなか動いてくれません。そのお母さんは違いました。彼女は「娘の幸せを願う一心で、涙ながらに訴えました。『どうか、この子の幸せを壊さないでほしい』『出身がどこかより、この子の人柄を見てほしい』と。その必死の思いが、少しずつ親戚の心を揺さぶっていききました。最終的に、長老一家を除いたすべての親戚が式に出席することになったのです。結婚式当日、晴れやかな笑顔で並んだ2人を見たとき、私は心の底から思いました。「差別をなくす力は、理屈ではなく、人を想う心にあるのだ」と。

しかし、残念ながら同じような事例は、その後も繰り返されています。ある若者は、3年以上付き合った恋人と結婚を決意し、マンションの予約金まで支払っていました。夢を膨らませ、未来を描いていた矢先のことで、親が興信所を使い、相手の出自を調べたのです。そして、「同和地区の出身」とわかった途端、態度が一変しました。「そんな人との結婚は許さなになり、家に帰ることすら苦しくなり、やがて夜遅くまで仕事を装って帰れなく

なりました。結局、家を出ざるを得なくなり、母親は心労で倒れてしまいました。差別がなければ、こんなに多くの人が傷つく必要はなかったのです。

私のもとには、毎年10組以上の結婚差別に関する相談が寄せられます。その9割以上は「地区外」の人からです。地区の出身者には支援のネットワークが少しはありますが、地区外の人は孤立し、「誰に相談すればいいのかわからない」と苦しみを抱え込みます。結果、結婚にこぎつけられるのは3〜4組程度。多くは親の反対に押し切られて別れるか、あるいは親との縁を切っても結婚するしかありません。前者は深い心の傷を残し、後者は夫婦にとって幸せであっても、親との断絶が暗い影を落とし続けます。

しかし、希望を感じさせる例もあります。ある家庭では、親戚から「相手は同和地区の出身ではないか、調べろ。」と言われました。すると父親はこう答えました。「興信所なんか使わない。大事なのは息子が幸せかどうか、それだけだ。」その姿に子どもたちは胸を張りました。「親父は偉い」と。差別に屈しない親の姿勢は、次の世代に誇りを与えます。私はその話を聞いて、胸が熱くなりました。差別をなくす道は、決して遠い夢ではない。人の勇氣ある一言が、未来を変える力になるのです。

皆さん、結婚差別は特別な誰かが行うものではありません。「親戚がどう思うか」「世間体が悪い」という雰囲気流されて、無意識のうちに加担してしまうのです。直接相手を知りもしないまま、「そういう出身ならやめておけ」と言ってしまう。その一言が、若い2人の人生を引き裂き、家族の絆を壊してしまうのです。だからこそ、私は強く訴えたいのです。大切なのは「血」や「出身」ではありません。

その人自身を、どれだけ大切に思えるか。共に生きていこうとする2人を、周囲がどれだけ支えられるか。それだけが本当に問われるべきことなのです。

40年以上、この問題に取り組んできて、私は確信しています。差別をなくすために必要なのは、難しい理屈でも、大きな理論でもありません。「人を想う心」、ただそれだけです。甥の幸せを守ろうと涙ながらに訴えたあの母さんのように、「大切な人の幸せを壊さないで」という思いこそが、人の心を動かし、社会を変えるのです。

どうか皆さんにお願いしたいのです。「当たり前」のことを、当たり前にする「ことを恐れないでください。出身ではなく、人柄を見る。親戚や世間に流されて差別に加担しない。ほんの小さな勇気の積み重ねが、確実に未来を変えていきます。」

差別をなくす力は、決して遠いところにあるものではありません。皆さん一人一人の心の中にあります。自分の大切な人を守る、その気持ちをどうか広げてください。

皆さん、差別は必ずなくせません。私たちが声を上げ、人を想い、共に歩んでいけば、必ずなくせます。未来の子どもたちが、「出身で結婚を諦める」なんてことのない社会を、私たちの手で実現しようではありませんか。

**第2回人権教育学級**  
「ウトロ地区の歴史と人権」  
差別と分断を乗り越えた力  
ウトロ平和祈念館 副館長  
金 秀煥(キム スファン)さん

私は、もともとウトロの出身ではありませんが、約15年前から生活支援や記録活動に関わり、現在は祈念館の運営を担っております。在日コリアン3世として日本で生まれ育った私にとっても、この地域の歩みを知ることは、自身の立ち位置を見つめ直す大きな契機となりました。ウトロの歴史と祈念館の取組を通して、皆さまと「人間の尊厳」について考えたいと思います。



は、戦時中に飛行場建設のために動員された朝鮮半島出身者が、戦後も行き場を失い暮らし続けた地域です。インフラが整わず、長らく差別や偏見にさらされてきました。周囲の人々からは「近づくな」と言われ、子どもたちでさえ偏見の中で育つ環境がありました。しかしそのような状況の中でも、人々は住まいを守り、生活を築き、次の世代へとつないできたのです。

この歩みは、一つの地域の歴史にとどまらず、社会の中で差別や貧困に直面した人々がどのように生き抜いてきたかを示す貴重な証でもあります。

この歴史を後世に伝えるため、2022年に「ウトロ平和祈念館」が開館しました。特徴は「民設民営」であることです。行政の大きな支援

や企業の後押しがあるわけではなく、皆さまの寄付と協力によって成り立っています。

開館当初、住民の中には「誰が来てくれるのか」と不安を抱く方も少なくありませんでした。しかし実際には国内外から多くの来館者があり、3年で延べ3万人を超える方が訪れています。とりわけ若い世代や海外からの訪問者が増え、ここで学び、感じたことを各地で共有してくださっています。祈念館は、単なる地域の記録施設を超えて、人と人をつなぐ場になりつつあります。

地元の学校とも協働し、学びの機会を作っています。ある高校では「文化と表現」という授業の中で、ウトロを題材に映像制作を行いました。生徒たちは最初、暗いイメージを抱いていましたが、地域の方と出会い、共に食事をし、交流を重ねる中で、その印象は大きく変わりました。

完成した作品は、重々しい記録映像ではなく、人々の笑顔が映し出された温かい内容でした。人権を学ぶということは、悲惨さを再確認するだけでなく、人が人として尊重される社会を思い描くことに他なりません。生徒たちの作品は、そのことを自然に表現していました。

また、祈念館の前には子どもたちが自由に使えるバスケットゴールがあります。ある日、韓国からの学生と地元の子どもたちが自然にチームを組み、試合を始めました。言葉は通じなくても、互いに笑顔で応援し合いながら交流する姿は印象的でした。大人が抱く固定観念とは異なり、

子どもたちは出会いそのものを楽しみます。その姿に、未来への可能性を感じます。

しかし、祈念館の建設中には、痛ましい事件も起こりました。2021年、差別意識を背景とした放火事件です。幸い人的被害はありませんでしたが、住民の生活は大きく揺さぶられました。差別が具体的な暴力や犯罪に至る現実を、改めて突きつけられた出来事でした。

私自身、事件を受け止めるのは辛いことでした。しかし、それでも向き合わなければならぬのだと思えました。差別は過去のものではなく、現在も私たちの社会に存在する、その現実を伝えることが、祈念館の役割の一つでもあります。

それでも地域の人々は諦めませんでした。被害を受けてもなお、学びや交流の場を守り続けています。祈念館は、ウトロだけの歴史を伝える施設ではありません。分断や偏見を乗り越える努力が、どのように社会を変えていけるのかを示す場です。そして訪れる人々が、その思いを持ち帰り、各地で共有してくださることが、次の一歩につながっています。ウトロの歴史は、特定の地域に閉じた物語ではなく、私たち一人一人が直面する課題と深くつながっています。分断や差別にどう向き合うか、どのように共に生きる社会を築くか。その答えを探す営みは、これからも続きます。

今日の私のお話が、皆さまの地域や活動において、人権や平和を考えきっかけとなれば幸いです。